
一つの異世界

南津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一つの異世界

【Nコード】

N0626Z

【作者名】

南津

【あらすじ】

四季一しきいちは大学に通う21歳の青年。中性的な整った顔立ちで、日本人らしい黒髪黒目。両親を幼い頃に亡くし祖父の家で暮らしていたが3年前にその祖父も亡くなった。両親と祖父の残してくれた遺産で大学近くの賃貸マンションを借り、階下にある洋服店でアルバイトをしながら一人暮らし。海外への短期留学の際に事件に巻き込まれて死亡、異世界に。膨大な魔力と特異な能力をもち、一人で異世界に放りだされたハジメの物語。

第0話＜プロローグ＞（前書き）

初めて書く物語ですので、文章が拙いものになっていたり。主人公最強物になります。が、戦闘が多いわけではない、と思います。バツサバツサ敵を斬ったり殲滅したりにはならないはず。ゆっくりとした更新になると思います。が出来るだけ長く連載をしていきたいと思っています。

第0話＜プロローグ＞

「……」

僕の人生が終わった。

21年。今日までの人生を振り返って長いのか短いのか。

天寿を全うする者からすると短いのだろう。母親から生まれて学校に通い、就職して退職。子供を育て両親を看取る。残りの人生をゆっくりと過ごすのが人生の目標だと言う人もいるだろう。

80年。だいたいその80年の間に人は様々な事を経験する。

僕の21年はどうだっただろう。

幼い頃に両親を亡くし、祖父に引き取られて中学・高校に進学。祖父を亡くして大学に進学。借りているマンションの一階にある被服店でアルバイトをしながら生活費を稼ぎ、親の残してくれた遺産で大学に通う。

在学中に海外へ短期留学し、その海外でテロに巻き込まれて死亡。

そう、銃撃を受けて死んだはず。

「……ということはどうゆうこと？」

目の前に広がっている風景はテロ巻き込まれた場所じゃないことは確か。

人が溢れていた街中の景色はなく木漏れ日が溢れる森があった。辺りには木や草のほかは何も無い。銃で撃たれたはずの胸や腹部には風穴があいて……いない。

「撃たれてない？ いや、確かに撃たれた……はず」

マシンガンみたいなので撃たれて死んだ……いや、死んでないけど。とにかく此処が何処だか分からないからな。とりあえず森から出るべきなのかな？

「まあいいか」

とりあえず森から出て人を探すことにしよう。此処が何処だか分からないんじゃないし。

今日は留学先から日本に帰る日だった。チケットも買ったし……

「……って、あれ！？ カバンがない！？」

今気づいたが持ち物が何もない。チケットも財布も他の物もカバンに入れていた。大体のものは自宅に送ったが……

「はあ、パスポートもない……」

ポケットを探ったが中には何もないみたいだ。

「どうやって家に帰れというのだ」

お金もないし、こういうときは何処に行けばいいんだ？ 空港？
大使館に行けばいいんだっけ？

「とりあえず森を出ようか」

どちらに行けば良いのか分からないので少しでも明るい方に行くか。



「……」

しばらく歩いて行くと何やら物音が聞こえてきた。人かな？森といったら熊とかだけどうそうエンカウトするようなものでもないだろう。……海外なら狼とかいるのか。

「怖っ」

少々寒気がしたが大丈夫……だろう。

……念のため石と木の棒を拾っておこう。

人じゃなかったら怖いから……慎重に近づくとしよう。

物音のするほうに気配を消して近づく……祖父に習って剣道を少しやっていたけど気配消す練習なんてしていない。

気分の問題だ。

近づいてみて驚愕した。

「なん……だと……」

なんて言って気を紛らわさないとやってられない。

熊みたいなのがそこにいた。体格的にみてそう判断したんだが……

これはヤバイ。

その熊を更に大きな何かが貪っている。

ヤバイヤバイヤバイ！！

熊や狼ならともかくあんな物に襲われたらあの熊みたいになっちゃう。

可及的速やかに此処を離れなくては。足音と息を殺して慎重に離れ

ないと。

此処でお約束の枝なんか踏んで物音を立てるようなドジな真似なんかしない。

慎重に……

ガサッ！

「っ！！」

……決して僕じゃないですよ。ホントに。

物音がした方を見ると何やら小さな動物がこちらを伺っていた。

「……」

振り返ってみると其処にいた何かは此方を見ていた。

いやいや……勘弁してくださいよ。



「っ……はっ、くう！」

引き離せない！ どころか少しずつ距離が縮まっている気がする！
とりあえず明るい方へ走っているが後ろのストーカーが諦めてくれない。

だんだん足音が近くなっている気がする。

僕は美味しくないよ！？

絶対さっきの熊みたいなやつの方が肉も多いに決まってるよ!!
何でこっちにくるんだ。

泣き言を口から洩らす余裕もない。息が上がる。足が上がらない。
足には自信があるが足場の安定しない森の中で必要以上に体力が奪
われる。恐怖で緊張し更に思うようにいかない……

「っ……!!」

瞬間、背筋に悪寒が走った。

咄嗟に横に跳ぶと今まで走っていた所を何か大きなものが過ぎった。
目の前に出たのは毛皮に覆われた何か。さっきから追いかけて来て
いたやつだ。よく見ると狼に似ているが正面から見ただけで自分の
身長を超えている。顔は真っ赤に染まっっていて先ほどまでの食事の
跡が窺える。

既に立ち上がる気力すらなく恐怖に震える。

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ!!

それは此方に向けて跳んできた。

恐怖が膨れ上がり体の奥から何かが急速に広がる感覚。

そこで僕は意識を失った。

第0話＜プロローグ＞（後書き）

おわり……え？

まだ主人公の名前も出てないので続きます。

第1話＜四季＞

「……ん」

（体が重い。なにがあったんだ？ テロで殺されて、それで……）

微かに意識が戻った青年は地面に横たわったまま回想する。

（森の中で彷徨って……）

「美味しくないよ!？」

「……っ!？」

食べられる前に見た光景を思い出し、叫びながら勢いよく起き上がる。体は重い感じがするが特に痛みは無い。

（味見もされなかったのだろうか。）

あの状態で無事だったことが信じられない。あの巨大な狼が目の前に迫る瞬間が鮮明に思い起こされた。背中を冷たい汗が流れる。

「夢……か」

無事なところを見ると夢だったのだろうと考える。妙にリアルな夢を見てしまったようだ。最早何処から何処までが夢だったのか分からない。

（テロに巻き込まれたのも夢だったのか？）

「目が覚めました？」

「え？」

不意に声をかけられて其方を見ると、其処には見たことも無いような美少女がいた。年齢は青年と同じくらいか、少し下の金髪の少女が椅子に座って青年を見ていた。艶やかなロングの髪は少女の整った顔立ちによく映える。透き通る碧眼は青年の姿を捉えている。少女の姿に思考が停止し、しばしの間惚ける。

「……」

「……聞いてます？」

少女は何かを青年に話しかけていたらしい。

「あ、すみません。聞いてないです」

惚けていたことを恥ずかしく思いながら何とか返答する。

（あ、聞いてないですなんて失礼だよな……。まあ実際に聞いてなかったんだから仕方ない。）

「……。ディゴウの森で何があったのか教えてもらえます？」

聞いたこと無い地名に青年は疑問を口にする。

「ディゴウ？」

「あなたがいた森のことです。二日前あなたが倒れていた森です。覚えてないですか？」

「いや、森にはいたけど……二日前、ですか？」

（どうやら二日も眠っていたらしい。ということはもう九月になったのか。明後日からバイトが入っていたっけ。帰るのに時間がかかりそうだから後でバイト前に電話を入れておかないといけないな。留学で結構お金を使ってしまったから少しバイトを増やした方が良さだろうか。大学卒業してしばらく暮らすには問題ないが、親が残してくれたお金は出来るだけ残しておきたい。）

これからのことをつらつらと考えていると少女から再び聞き覚えの無い単語が聞こえてきた。

「ええ、今日はテルトゥリア一巡月の七日です」

「……テルトゥリア？　って、なんですか？」

とりあえず疑問をそのまま投げかける。彼女の言い回しから今日の日付を言っているのだろう事は推測できるが。

「……大地の神の名前です」

「大地の神？」

「ええ、風の神ヴァンテセラ、火の神フォティエナ、大地の神テルトゥリア、そして水の神オーズィオ。その名前は風の季節、火の季節、地の季節、水の季節のことも示しています。常識ですよ？　覚えてないんです？」

「いや、そもそもそんな神様なんて知らないですけど」

「……」

「……」

二人の間に重たい沈黙が流れた。そんな神様の名前は青年には聞き覚えが無い。それに、四季を表すのに風や火、地や水を用いることもなかった。

（この際分らないことは置いておいて現状の把握に努めることにしよう。）

「……えっと、ここは何処ですか？」

当たり障りの無い内容から確認する。意識を失っていた人間の常套句だ。

「……ここは私の家です。貴方はディゴウの森で気を失っていて、色々と聞きたいことがあったので保護しました。森で何があったか聞かせてもらってもいいですか？」

彼女も様々な疑問は置いておいて聞きたいことだけ先に確認することにしたようだ。逸れていた最初の話題に話が戻った。

「それはいいですけど……それならあとで君に聞きたいことがあるんですけど、良いですか？」

（此処が誰の家かは分かったが、此処が何処かという疑問は解消されていない。後でもう一度聞いてみないといけないか。）

「……いいですよ。私はフランシエシカといいます」

君という呼び方をしたためか彼女は名前を名乗った。そこで青年も自己紹介をしていなかった事に気付く。慌てて謝罪をし自己紹介を始める。

「あ、すみません。僕は一はじめといいます。四季一しきはじめです」

「シキというと季節の四季ですか？」

「ええ、四季が苗字で一が名前ですね」

「みょうじ？」

フランシェシカは四季は分かるのに苗字が何か分からないらしい。

（外国の人みたいだからかな？）

「あ、えーとファミリーネーム？ 家名ですか？」

「ということはハジメ・シキですか」

「そうなりますかね……？ あれ、そういえば日本語が通じてるんですか？」

（日本語で話しているつもりなのだが、此処は日本なのだろうか？）

「ニホンゴ？ 話しているから言葉は通じてますよ。この世界で生まれたものには皆言葉の加護がありますからね。会話は誰とでもできますよ。文字はいくつか種類があるので……って常識です」

（コトバノカゴ……？）

「え。言葉の加護ってなんですか？」

再び疑問に思ったことを口に出す。自己紹介を始めたことで再び話題が逸れてしまっているのだが……

「……」

「……」

（……どうやらこれも常識というもののようだ。）

「……とりあえず、森であったことを先に聞いていいですか？」

逸れてしまった話題を元に戻すべくフランシェシカはきりだした。



「……そうですか」

ハジメが森での出来事をフランシェシカに説明すると、彼女は沈痛な面持ちで一つ頷いた。ハジメが話をしている間フランシェシカは特に口を挿むことなく黙って聞いていた。

「ええ。あれはなんだったんですか？ 見たことのない動物だったんですけど」

「それはおそらくクルオルウルフだと思う。最近あの森で目撃されていた魔獣ね。私もあの魔獣を討伐しにディゴウの森に行ったんだけど、現場の様子と貴方の話を聞いたところもう死んでるようね」

「……？ 死んでるって……そのクルオルウルフ？ とか言う」

（僕が死んでいないのだから何かあったのだろうが、死んでいるとはどういうことだろうか。話し方からすると死体の確認をしたわけではなさそうだけど。）

「ええ。おそらく貴方の魔力の暴走で跡形もなくね。酷いもんだったわよ。普通の人間の魔力が暴走したところであそこまで被害が出ることなんてないのに。精確には分かんないけど視た限りじゃ貴方の魔力は私以上ね。いえ、たぶん貴方より魔力が高い人なんて居ないんじゃない？ 貴方本当に人間なの？」

（魔力？ 暴走？）

「人間ですけど……。それより魔力ってなんですか？ そんなもの無いと思いますけど」

魔力というとファンタジーとかでよく聞く単語だ。物語の中ではよく聞く言葉だが、実際にそんなものがあると聞いたことは無い。先ほどから神の名前だとか魔力とか聞いていると何故か変な事に巻き込まれているような気がしてくる。

（……宗教の勧誘だろうか。）

「……貴方それ本気で言ってるの？ さっきから常識も知らないし」「いや、常識と言われても。知らないものは知らないですし」「そう。……そういえば貴方何処から来たの？ 常識も知らないし何処かの山の中で暮らしていたのかしら？」

（なんだか失礼なことを言われた気がする。……まあ良いけど。）

「街に住んでましたけど……日本です」

「ニホン？ 聞いたこと無い国ね。えっと……この地図のどの辺りかしら」

フランシエシカは部屋の棚から折りたたまれた少し茶色掛かった紙を引っ張り出す。地図らしいそれを広げてハジメに見せる。

（日本は太平洋の……太平洋……の……）

「……えつとこの地図って何処の地図ですか？」

「……世界地図だけど」

見たこと無い地形の描かれた世界地図らしきもの。大陸のようなも

のは三つ。ハジメはどの大陸の地形も見ることが無い。地図に書き込まれている文字も読めない。

「ははは、冗談きついですね。こんな世界地図見たことないですよ」

「……」

「はは……は……」

「……」

再び二人の間に重たい沈黙が落ちた。



「異世界……ね。本当にそんな所があるのかしら」

フランシエシカに森に来る以前のことを説明した。今まで居た世界がどんな世界だったのか。そして、どのようにして死んだのか。

「いや、僕も分かりませんよ」

本当に分からない。しかし、今が現実だというのならそういう事なのだろう。元の世界で銃で撃たれたことも、この世界で生きていることも。

（あちらの世界はどうなっているのかな。日本のニュースなんかで「行方が分からなくなっているのは日本人留学生の四季一さん。現場に所持品と共に血痕が残されており……」なんて報道されているのだろうか。そもそも死体は残っているのだろうか。）

「その話が本当なら、貴方はそちらの世界で死んでるんじゃない？」
「まあ、あの痛みは本物だったけど」

（傷が残っていないということは別の肉体なのだろうか……治っただけなのか。）

「そちらの世界で死んで、原因は分からないけど此方の世界にその姿で転生した。そう考えるべきでしょうね」

「あの傷で生きていられるとは思えないよね……もう戻れないかな」

身内も居ないため、あまり困ったことにはならないだろうが、バイト先とか大学とかにはそれなりに迷惑が掛かるかもしれない。

「少なくとも異世界へ行ける、なんて話は聞いたことが無いわね」

この世界でもそんな話は聞いたことが無いようだ。帰る方法を探しながら此方で暮らしていくしかないということだろう。

（……向こうの世界にあまり未練も無いけど。）

「そっか……これからどうしようかな」

「とりあえず、この世界のことを話すから。それから考えましょう？」

「そうですね」

とりあえず此方の世界のことを聞いてから考えるのもいいだろう。魔力なんてものがあるくらいだから魔法なんかもあるだろう。

少しわくわくしてきたのはとりあえず内緒だ。

第2話＜サルトリゼ＞

神々の加護の恩恵を受けた世界、サルトリゼ。この世界で生まれたものは皆、様々な加護の恩恵を受けて暮らしている。その最たる物が魔法である。この世界に暮らす者は誰一人例外なく魔力を保有している。最もその資質は個人で大きく異なるのだが、資質を持たないものは魔力こそあるが自ら魔法を行使することが出来ない。

魔術の属性にも様々な物がある。最も一般的な属性は五つで、無属性、地属性、水属性、火属性そして風属性だ。資質を持つ者の殆どはこの五つの属性の特性を示す。

更に極稀に空属性、時属性、光属性、影属性に資質が有る者も居る。現在確認されているこの四つの稀属性の魔導師は空が二人、光が五人、影が七人。時の属性を持つものは二十年ほど前から確認されていない。

魔術の資質を持つ者の多くは一つから三つの属性に目覚める。二つの属性の資質を持つ者が最も多く、次が一つの属性、更に少なくとも一つ三つの属性となる。四つの属性を示すものは更に稀で、確認されているものは世界でも二十人程。稀属性を持つものは皆この内に含まれている。

この資質の組み合わせは様々であり、発現し易い属性順に並べると無＞地＞水Ⅱ火＞風＞＞影＞光＞空Ⅱ時と考えられている。この資質は生まれた時から決まっいて生涯変わることはない。

この大陸“カドラグニス”は様々な種族が国家を形成して暮らしている。エルフ族、獣人族など、人間族以外の種族も存在する。人種の多くはその他の種族を亜人種と呼び区別している。カドラグニスに点在する国家の殆どは人間族の国家であり、亜人種の人権を認めていない場合も多い。

他種族より魔力も力も弱い最も人口の多い人間族は、国家を成して

暮らしている。魔力の低い人間族は寿命も140〜200年と、獣人やエルフなどの他の種族に比べて短命だ。他種族間の半血種族^{ハーフ}も存在し、その場合も魔力によって大体の寿命が決まっている。この半血種族も人間には亜人種とされて区別される。

ハジメが今居る此処はカドラグニスの大国の一つであるサルクノール王国にある一都市から少し離れた森の中にある。サルクノールには他種族も暮らしており、他の国家よりは人間族以外にも比較的暮らしやすい国である。

フランシエシカはエルフと人間の半血種^{ハーフ}で、現在82歳らしい。これは長寿のエルフとしてはまだまだ若く、人間の年齢で考えると成人年齢《16歳》より少し上程度である。最も人間からすれば知識も経験も豊富なため人間の基準で考えることは出来ない。またフランシエシカの魔力はエルフの中でも高い部類に入り、人間との半血種だがエルフの特徴が濃く現れている。

「フランシエシカさんはエルフのハーフなのか」

「ええ。半血種だから耳はエルフより少し短いけどね」

「へえ……触ってみても良い？」

やはり気になってしまう。触らせてくれないだろうかと目を輝かせながら尋ねる。

「良いわけないでしょう」

「いや、やっぱり気になるというか。前の世界には人間しか居なかったし」

（獣人も居るということは猫耳やら犬耳なんかも居るのだろうか……。爺さんの家で昔飼っていた犬の耳も気持ちよかったし、触ってみたいものだ）

「自分の耳に触ればいいでしょう。そんなに変わらないわよ」
「むう……」

（そうだろうけど、エルフの耳ということに価値があるんじゃないか……）

未練たらしくフランシシカの耳を眺めていると少し顔を赤くしながら話題が変えられる。

「他に聞きたいことはない？」

「んーと、僕の魔術の属性は分かるのかな？」

魔法があるのなら使ってみたいと思うのは当然だろう。しかし適性がないと魔力があっても使えないらしいためドキドキしながら質問する。

「それは実際に調べてみないと分からないけど」

「どうやって調べるの？」

「簡単な魔術を使ってみるしかないわね。暴走したのだから何かしら適性はあると思うけど」

「……暴走したら何か属性に適性があるって分かるの？」

属性があるだろうと言われて少し安心したが、その根拠が分からなかった。

「ええ、属性を持つもので魔術を学んでいない者は大体子供の頃に一度は暴走するの。貴方ほどじゃないけど部屋の中のもの壊れる程度にね。洗礼みたいなものよ」

「ふーん。……そういえば最初魔力の暴走でクルオルウルフとかが死んだはずだって言っていた気がしたけど」

「貴方の暴走は最悪だわ。周りの森ごと消し飛んでいたもの。家の中や街の中だとすごい被害が出ていたでしょうね」

「え……」

「五十メルデくらいの範囲の地面が抉れてその真中辺りに貴方が倒れていたの」

「五十メルデ？」

「ん？ あー……この部屋の端までが四メルデくらいかしら」

（ということは一メルデが大体1メートルかな？）

「って、五十メルデ!？」

五十メルデが五十メートルだとすると相当な範囲だ。それが消し飛んでいたらしい。

「ええ、森の一角が綺麗になくなっていたわ。その中心にいたんじや、クルオルウルフも一緒に死んじやったんじゃないかな」

「……」

「とりあえずまた暴走しないよう魔力のコントロールを身に付けなさい。属性の魔術が使えるようになれば暴走することも無くなるでしょう」

「……どうやって？」

コントロールを身に付けると暴走も起り難い。魔力の制御の方法が分からないとどうしようもないが。

「それは私が教えてあげるわ。人間はあまり好きじゃないけど、貴方は異世界の人間だし興味があるわ。魔力もかなり多いみたいだし」

フランシェシカはあまり人間が好きじゃないようだ。人間の多くは

他種族を差別しているみたいだから仕方ないのかもしれないけど、昔何かあったのだろう。

「いいんですか？」

「いいわよ。まあ貴方の体調と魔力が整ってからになるけど。暴走の後は意識を失うし四、五日は魔力を使わない方がいいから」

「よろしくお願いします。フランシェシカさん」

「フランでいいわ。貴方のこともハジメって呼ぶから。あ、それと貴方は簡単に家名を名乗ったけど初対面の相手にはあまり名乗ることは無いからね。覚えておいた方が良いわ」

（やっぱり貴族なんているんだな）

「初対面の人に名乗らないんですか？ 僕の世界では普通に名乗っていたけど」

「貴方の世界はどうか知らないけど、此処だと家名がある人間は貴族とか王族とか、他にもいるけど少ないのよ。信用できない人間に名乗る必要は無いわ」

「フランも家名はあるの？」

「ええ、フランシェシカ・ラザズ。それが私の名前」

「貴族？」

「貴族は人間の爵位でしょ。エルフの家名はあまり関係ないわ」

「ふーん。……家名を教えてくださいってことは少しは信用されてるって事かな？」

「……」

若干きつめの視線でにらまれた。美人な分、睨まれた時のダメージは大きい。

「じよ、冗談です」

「……しばらくこの家で暮らすことになるだろうからね」

「え、此処に住んで良いの？」

「何処に行く気よ。此処から街まで歩いたら三日ほどかかるわよ？
行きたいなら別にいいけど」

「ここに居させてください」

「……他に聞きたいことは無い？ 魔術の練習も早くても明後日か
らになるし、聞きたいことが見つからなかったら明日聞いてくれて
もいいけど」

「うーん……この世界で暮らしていくために知っておいた方が良好
事はないかな」

すぐには思いつかなかったため今日のお勧めを聞く。

「……色々あるわよ。言葉は通じるけど文字は覚えないとだめね。
ギルドなんかで依頼を受けるにしても読めないとかだめだし。魔術と
一緒に覚えていった方がいいわ。文字が読めれば本も読めるしこの
世界のことも色々調べられるでしょう」

「文字か……。言葉が通じるのに文字は読めないのは不便だね」

「言葉は加護を受けた時点でこの世界の誰とでも話せるからね。貴
方が喋ってる言葉も違和感無いわよ？」

「……そういえばそうかも。なんか日本語で話してるけど日本語じ
ゃないみたいなの……」

（そもそも今考えているのも何語で考えているのか分からなくなっ
てきた……思考がこの世界の言葉に統一されたのかな……）

「文字は幾つか種類があるって言ってたけど、それは？」

「この世界は言葉も共通だから文字も基本的には共通よ。古代文字
なんかもあるからね。覚える必要は無いかな」

文字は一種類だけでいいのか。元の世界じゃ考えられないな。ということは通貨なんかも共通だったりしないのだろうか。

「それじゃあ、お金について」

「お金か……ちよっと待ってね」

言って部屋を出て行き、戻ってくるとフランは小さめの袋を一つ持っていた。ベッドの上に袋から取り出した硬貨を四枚並べる。

「この銅貨が基本で一エイド。銅貨十枚で銀貨一枚、銀貨十枚でこの小金貨。小金貨が十枚でこの金貨一枚ね」

一緒に聞いた宿の代金や食事の値段から通貨の価値は銅貨が百円くらいで小金貨が一万円くらいの価値があることが分かる。小金貨から通貨の単位が変わるようで、小金貨は一アルド金貨とも言われている。

通貨には他の金属も入っていてその比率は決められていてギルドとというのが出来て暫くして世界共通になったようだ。偽造は魔術で簡単に分かるようになっていたとの事だ。

「あとは……さっきも言ってたギルドって言うのは？」

先ほどの会話に出てきた気になる単語をあげた。

「ギルドは幾つか在るわ。一番人が多いのは冒険者ギルドね。これは世界中にあるわ。後は各国で魔導師ギルドや商人ギルドなんかがあるかな。商人ギルドは国を跨いで在る事も多いけど、魔導師ギルドは基本的に自国内にしかない」

「冒険者ギルドか……定番だな」

異世界ときたら冒険者ギルドだろう。知っていました。

第3話＜ギルド＞

「冒険者ギルドか……定番だな」

「ん？ なに？」

小さく呟いた為フランには聞き取れなかったようだ。

「いや、魔導師ギルドが国内だけって言うのは？」

「魔導師ギルドは基本的に独自の魔術の研究なんかをしてるから、他国に設置するメリットは無いわ。優秀な魔導師は自国で囲っておくのが普通だから。といっても、冒険者ギルドにも登録している魔導師も多いからあんまり意味無いけどね。それから冒険者ギルドと魔導師ギルドや商人ギルドの重複は出来るけど魔導師ギルドの重複は禁止されているわ。」

「フランもギルドに入ってる？」

「私は冒険者ギルドとこの国の魔導師ギルドに入ってるわね。魔術学院に入った人はみんな魔導師ギルドに入らされる。私も昔それで登録したの。今は基本的に冒険者ギルドで依頼を受けてるから魔導師ギルドはあまり関係無いわね」

「それじゃあ僕も冒険者ギルドに入る方がいいのかな？」

「それは自由にすればいいと思う。お金稼ぐなら冒険者ギルドに入って依頼をこなしていくのが早いかな」

冒険者ギルドの依頼は魔獣の討伐や護衛、他にも雑用やら色々ある。ハジメを見つけたのもギルドの依頼でクルオルウルフを討伐するためにディゴウの森に来ていたらしい。ディゴウの森に着く直前に森で強力な魔力爆発が起こって駆けつけたところにハジメが倒れていたようだ。その後ハジメに結界を張って周囲を検索しクルオルウルフが居なかったためハジメを自宅に保護し、ギルドに森の様子を報

告。ハジメの存在を隠して原因不明の損害があった事と、周囲にクルオルウルフが居なかった事を報告し、現在ギルドで現場の調査が行われているようだ。もちろんフランの依頼は達成したことはないなかった。ギルドの調査完了を待って依頼の扱いが決まることになる。

ちなみにディゴウの森は此処とはかなり離れていて、此処には無属性と風属性の複合最上級魔術の転移で来たらしい。属性の組み合わせが必要で難しく、消費魔力が多いためエルフでも何度も仕えないらしい。

空属性だと単体の属性で空間転移があるようだ。

「そっか。やっぱり冒険者ギルドってランクがあるのかな？」

「ええ。低い方から白、黄、青、赤、緑、黒、白銀かな。色の元は魔術の属性って言われているけど本当かどうかは知らない」

「フランは何処？」

「黒ね。白銀は十人くらいかしら。白銀なんかは特別な事がないとなれないわ」

一番多いのは赤で緑から黒にいくと少なく、白銀は稀。稀属性を持って冒険者をしている魔導師で白銀は二人。空が一人と光が一人であとは剣士やら魔導師が数人いるらしい。

冒険者ランクはギルドカードの模様の色が変わるらしい。フランのカードを見ると何か文字と文字のないスペースに綺麗な模様が描かれていた。植物がモチーフのような模様が右下角から文字を避けながら全体に広がっている。この模様も一人ひとり微妙に異なる。

フランが魔力を通すと、更に文字が浮かんできてそれを避けるように模様が変化する。この文字は本人の魔力でのみ浮かび上がり、身分の証明にもなる。

「白銀になるとギルドからの指名の依頼が主になって何処かの国で

落ち着いて活動することが少なくなるらしいわ」

「フランは白銀を目指してるの？」

「そんな面倒なことしないわ。黒で十分に稼げるし」

どうやら面倒なことは好きではないようだ。街から離れた森にいるのも人付き合いが面倒だからなのか。

聞いてみると近くの街にも一軒家を所持しているらしく、依頼を受ける際は其処を拠点にして活動しているという。ギルドランク黒という危険度は高いが高額の依頼も多く、複数の拠点を持っている者もいる。フランはこの森の家と街に一軒、離れた別の都市にも一軒持っているが一年の多くはこの家で過ごすことが多いとのことだ。

「これくらいかしら？ そろそろ夕食の時間だけど」

「それじゃあ最後に食事について」

食事の話が出たので気になることを聞いておく。

「食事？ 夕食ならこれから用意するけど？」

「一日何食かな？ 前居た所では三食だったんだけど」

「私たちも三食ね。二食や四食の所もあるけど、冒険者はみんな三食じゃないかな」

「よかった。二食とかだったら耐えられないから」

冒険者は朝食事をして移動し、昼に休憩を入れて食事。夜営の準備をして夕食を食べるというパターンが多い。何度も食事の準備をするのは移動の効率を下げてしまう。

「それじゃあ夕食にしましょうか。他に何か聞きたいことがないか考えておいて」

準備をするからとフランは部屋を出て行った。



暫くしてフランが食事を持って部屋に入ってきた。

夕食のメニューはパンとシチューのようだ。器から湯気が上がり美味しそうな香りが漂って来た。

「動けるでしょ？ こっちに座って」

部屋にあるテーブルに食事を置いて着席を促してくる。ハジメはベツドから起き上がってテーブルの方に近づく。フランも席につき、一緒に食事を始める。

「いただきます」

「……？」

「あー食事前の挨拶みたいなもの。この世界では何かある？」

「そうね……神に感謝の気持ちを伝える言葉を言うところもあるかな？ わたしは面倒だからしないけど」

「そうなんだ。あんまりしない方がいいか」

「するならこの世界の作法でやったほうがいいわね。異世界の習慣を色々やってたら目立っちゃうかもしれないから」

ハジメも異世界出身であることを広めようとは思わないため素直に頷き食事を始める。

「美味しい」

「そう。ハジメの世界での食事がどんな物か分からなかったから、口にあったようなら良かった」

「こんな料理は元の世界にもあったよ」

シチューに入っている野菜は中まで火が通っていて軟らかく、味がよく浸み込んでいた。フランはパンを少し千切ってシチューに浸けて食べていた。ハジメはパンを千切ってみるが地球のパンほど軟らかくなく、フランと同じようにシチューに浸して食べる。パンの改善が必要なようだがパンの作り方は知らない。

（こんなことならパンの作り方を調べておけばよかった……。何かで読んだことも有る気がするけど思い出せない）

この世界でも柔らかいパンがあることを願いつつパンを口に運ぶ。一人暮らしをしていたので料理はある程度出来るがパンを自宅で作ったことはない。

食事を終えんとする事が無くなった。まだ日が暮れてあまり時間が経ってないため夜遅い生活をしていたハジメは暇を持て余していた。

「フラン。今から時間あるかな？」

「あるけど、どうかした？」

「今から文字とか教えてもらっていいかな？」

「いいわよ。すぐ覚えられるわけじゃないだろうけど、言葉と意味が分かるからある程度覚えたら簡単に読めるようになるでしょう。読みながら口に出したら自然に意味が分かるんじゃないかな」

言葉の加護がある為か文章を言葉に出来れば意味が分かるらしい。文字の数は比較的多いみたいだが言葉の意味が分かる大人なら簡単に習得できるそうだ。

（英語の文章を見ても意味が分からなくても正確に読み上げれば意味が分かるようなものか？）

なんとも不思議な事だ。これならこの世界の識字率はかなり高くなりそうだ。音読できれば意味が分かるのだから。しかし人前で音読は結構恥ずかしいので、見ただけで意味が読み取れるようにしっかりと勉強しておこう。

フランに習っている間、英語で喋っている意味を日本語で考えているような不思議な感覚がした。慣れれば文章の発音と意味と思考が一致するらしい。文章を見ただけで理解するのは暫く先になりそうだ。

「それじゃあもう遅いしこのくらいにしましょうか」

「もうそんな時間？　ここがどのくらいの時間で一日が経つのか知らないから分からないな」

「時計があるから見てみる？　時間の感覚が違うと慣れないわよね」
「そうだね」

時計を借りて見てみると円が四つに区切られている。この目盛りの意味を聞いてみると一目盛り三刻で、最初の目盛りが朝の鐘の時間、次の目盛りが昼の鐘、最後の目盛りが夕刻の鐘の時間に合わせてあるということだ。何処の町にも鐘があるらしく、国ごとに鐘の時間が決まっているらしい。国が変われば鐘の時間が少しずつ異なるらしいが、朝、昼、夕の鐘の数はどこも同じらしい。

短針と長針があるが見ているだけではどのくらい時間が進んだのか良く分からない。明日から体感の時間を確かめておく必要があると思うだ。

「時計は必要だと思うからある程度お金を稼いだら買っておいただうが良いわね」

「そうだね。武器なんかも買わないといけないかな。魔術の発動には何か必要になる？」

「初級魔術くらいなら無くても発動できるけど……それ以上だと魔

導具が必要かな」

「魔導具？」

「ええ、私が使っているのはこの杖ね。ここに宝石が取り付けられているでしょ？　これが魔導具の核になっているの。杖はおまけみたいな物かな。材質や形状、刻印なんかで性能も値段も変わってくるけど一番大切なのはこの宝石。魔宝石っていうの。そのままね」

「それは特別なもの？」

「魔宝石には特定の属性でしか使えないなんてことはないけど特性はある。大体色で分かるけどこの魔宝石は水の特性ね」

綺麗な藍色の宝石が杖に埋め込まれている。見ただけでその特性が分かるようだが良いのだろうか。

「私の属性は水と風と無属性。他の魔宝石も杖の内部に埋まっているわ。三属性の適性を持つ人は二属性に比べて多くないからどうしても特注の一点ものになってしまう。この杖は元々風と無属性の杖だったけど貰い物なの。デザインや材質、中の魔宝石も結構良い物だから水属性の魔宝石を追加したの」

一点ものを特注するのが面倒だったのだろうか。

閑話くフランシエシカく(前書き)

フランシエシカ視点。

閑話＜フランシェシカ＞

人間を拾った。

元々ディゴウの森にはクルオルウルフ討伐の依頼を受けたためやってきたのだ。森に到着する直前、森の中で爆発的に魔力が広がるのが分かった。一瞬遅れて爆発音が聞こえてきた。急いで駆けつけた先にその人間が倒れていた。

人間の周囲は酷い有様だった。森の中ほどにあり木々が生い茂っているはずの場所が、五十メルドほどの範囲に木が一本も残っていなかった。地面は抉れ地表がむき出しになっていた。

原因を探るためにも、この人間に事情を聞かなければいけないだろう。おそらく魔力の暴走が起こったのだろうが、確証が無い。

周囲を探索・走査しクルオルウルフの反応が無いことを確認し、人間と共に転移で自宅に戻る。

汚れを風の魔法で飛ばした後、客室のベッドに人間を寝かせた。その人間は見たことも無い真黒な髪の色をしていた。顔は整っており寝顔は安らかだった。

一度ギルドに戻り森で爆発痕を見つけたことを報告。クルオルウルフが森に居なかった事から爆発に巻き込まれたのでは無いかと報告しておいた。ギルドから調査の依頼がでるらしい。

ギルドに報告した後、適当に買い物を済ませて自宅に戻る。人間の様子を確認するが目を覚ます気配は無い。魔力の暴走の後は一日か二日意識を失うことが多い。あれが暴走の痕だとすると二、三日は目を覚まさないだろう。

人間が目を覚めたのは保護した日から二日たったテルトウリア一巡月の七日だった。

「美味しくないよ!？」

「……っ!？」

起きた瞬間大声で意味の分からないことを叫んで起き上がった。夢でも見ていたのだろう。

「目が覚めました？」

「え？」

人間に話しかけると此方を向いて固まった。人間の目は髪と同じ黒色で髪と同様見たことが無かった。

「早速ですが、森で何があったか聞いてもいいですか？」

「……」

人間は此方を見たまま動かない。話を聞いていないらしい。

「……聞いてます？」

「あ、すみません。聞いてないです」

返ってきた返事はそんな言葉だった。



人間はハジメというらしい。

常識が全く無かったが異世界の人間だった。異世界の存在は聞いたことが無かったが嘘を言っている様子は無いため、信じてもいいかもしれない。

話をしている最中ハジメの視線はしばしば私の耳に注がれていた。触って良いかと聞かれたが他人に触らせるようなものじゃない。ハジメの世界にはエルフなどは居なかったらしく、興味があるようだ。

人間は少なからず私たちエルフや獣人などを亜人種と呼び敬遠する。酷いところでは差別したり、奴隷として痛めつけたりされている。私はあまり人間が好きではない。それに私は半血種のためエルフにもあまり良い顔をされないことさえある。

冒険者ギルドに入ってこんな森の奥で暮らしているのも他人を遠ざけるためだった。ある程度お金があれば一人でゆっくり暮らしている。歳の離れたエルフの姉には王都で一緒に暮らさないかと昔から言われているが断り続けている。

ハジメは不思議な人間だった。異世界の人間だからだろうか、エルフと聞いても特に驚いた様子も無く私の耳に対して興味があるらしくチラチラと視線を感じる。その様子が少し可笑しかった。

簡単にハジメの魔力を調べてみたがエルフの私や、姉なんかより遥に膨大な魔力を持っていた。多いことは分かるがどのくらい多いのか私でも分からなかった。彼が目立ちたいのじゃなければ、魔力量を誤魔化す魔導具を渡した方が良いかもしれない。

「……家名を教えてくれたってことは少しは信用されてるって事かな？」

この言葉を聞いた時驚いた。人間に自分から家名を教えたことは今まで一度も無かった。姉の知り合いで相手が知っていることはあったが、自分から名乗ったことは一度も無い。話の流れで名乗ってしまったようだ。つい睨んでしまった。ハジメは別に悪い事はしてい

ないのに。

その後も適当に必要な知識を教えている内に、何時も夕食をとっている時間になった。他人に食事を作ることもあまり無かったし、ハジメは異世界の人間らしいので口に合うものが作れるか自信が無かった。

幸い同じような料理は食べたことがあるらしく安心した。料理も美味しいと言ってくれた。何時もより若干力を入れて料理した甲斐があった。



翌日、客室に様子を見に行くとハジメはまだ眠っていた。朝食の準備が出来たので呼びにきたのだが寝顔を見ていると起こすことが憚られる。暫く眺めていたが、我に返ってハジメを起こす。

朝食はパンと簡単なスープだ。食事中にハジメはパンの固さを頻りに気にしていた。どうやら地球というところではもつと軟らかいパンを食べていたらしい。この世界にも柔らかいパンが売っているか聞かれた。

他にも食材について色々聞かれたが、どれも聞いたことが無い物で、知らないと言うとがっかりされてしまった。仕方が無いじゃない。長い間此処で暮らしているんだから、あまり他の国に行ったりしないのだ。

今度出掛けたら何か有るか注意してみておこう。

そういえば誰かと暮らすのはすごく久しぶりだった。何時以来か覚えていない。ハジメは人間だが一緒に居ても何故かいやな感じはしない。冒険者をやっている以上人間ともそれなりに関わるが、ハジメのような感じは初めてかもしれない。

きつと異世界人だからだ。

食事が終わればハジメに文字を教えたり、家の中を適当に案内したりして過ごした。お風呂が無いのか聞かれたが、この家には無い。この家は姉の知り合いの空属性の魔導師に設置してもらった。私は家の近くの川で沐浴しているし、こんな場所に家を用意するだけでも大変だったのだ。建てた当時はお風呂のことなんて考えたことも無かった。

お風呂が無い事を知ったハジメはすっかり落ち込んでしまった。聞いてみれば地球では毎日お風呂に入る習慣があったらしい。取りあえず今日もお湯で体を拭くだけで我慢してもらおう。

ハジメの魔力も大分落ち着いてきたようなので明日には魔術適性を調べることは出来るだろう。

一度魔力が暴走したら魔力を制御する練習をしていなくても自分の中の魔力を感覚的に知ることが出来る。人間はエルフや獣人と違い、子供の頃に魔力制御を学ばないものが多いので、子供の内によく暴走する。魔力も低いのであまり影響は無いが、暴走がきっかけで魔術を学ぶようになる。

魔導具は魔力制御の刻印のある指輪でいいだろう。指輪は無属性の発動具だが特に問題ない。私には少し大きく普段使わないものだから無属性が使えるようならハジメにあげても良いかもしれない。

閑話くフランシェシカく(後書き)

描きたいことを書くのはやっぱり難しいですね。

次は魔術適性を調べます。

第4話＜魔術適性＞（前書き）

書き溜めているわけじゃないので話がどうつながるか……

二、三章くらいの話までの概要Word2ページくらいしか書いてないし、設定もその都度なので矛盾が無いようにできるだけ気をつけていますが、何かあったらごめんなさい。そのうち設定はまとめようと思います。

まだお金使っていないのに銅貨を十円くらいに少なくなってきた……

第4話＜魔術適性＞

魔導具には大きく分類すると二つに分けられる。

一つは魔導師が自身の魔術を発動させる、発動具として用いられるもの。一般的には術具や発動具などと呼ばれる。

一つは魔力を持つ人間が魔導具に刻まれた魔術を発動させる、道具のように用いられるもの。此方の方が術具などより圧倒的に使用者が多いため一般的に魔導具と呼ばれている。

魔宝石は基本的に前者の魔道具に使用される。後者にも用いられることはあるが魔宝石自体に術を刻印する必要がある、一度刻印を施すと魔宝石の特性が一つの魔術に固まってしまい、別の術への再利用が不可能になってしまう。そのため制作費だけが上がり、不要になった場合には格安の値が付く。また、魔導師が同程度の魔宝石を使用して発動する魔術ほどの効果も出ないため、効率が悪い。そのため特別な意図が無い限り魔宝石に刻印を刻むことは無い。

魔宝石を使用する魔導具にも様々な形状が存在する。

フランが愛用している魔導具《発動具》は一メルデ程の杖の形状をしている。形状もただシンプルなのではなく、美術品としても価値がありそうな流麗な形状をしていた。

「これは？」

「無属性の発動具よ。属性を調べるだけなら必要ないと思うけど、その魔導具は魔力制御の刻印が入れてあるから少しは魔術が発動しやすくなるはずよ。無属性が使えるようならそれはハジメにあげる。」

現在、ハジメが手にしているのは指輪の形状をしている小さな発動具だった。広めのリングに小さな宝石が詰められている。刻印とやらを探してみるがハジメには分からなかった。

「刻印は魔力で刻まれているのよ。普通の人間の目に見えるわけ無いじゃない。私は魔力走査出来るから刻印の魔力が分かるけどね。これは人間の半血種である恩恵ね。」

「人間の？」

「ええ。人間は他の種族にある固有の能力を持っていないの。獣人なら身体強化、エルフは魔力特性かな」

どうやらエルフは魔術に対して高い資質を示す魔力特性というものがあるらしい。同じように獣人も高い身体能力と身体強化の能力が種族として備わっているということだ。

「人間は固有の能力を持っていないけど、個人としては偶に能力を発現させる人もいるのよ。最もその多くは魔術でも代用可能なものだけど、能力を使用する際の魔力消費は格段に小さくなる。私はハーフだからあまり期待してなかったけど運良く魔力走査が出来るようになった」

魔力を感じるだけなら魔導師は可能らしい。フランの魔力走査は魔導具に刻まれた刻印でも詳細に内容を読み取れるそうだ。刻印の詳細まで読み取れる能力は珍しいようで、走査まで行かない魔力検知などは比較的多い。魔力検知や、走査が出来る人間は魔導師ギルドや商人ギルドに多く所属している。

「へー。僕にも何かあるのかな？」

「それは分からないわね。私も最初に発動するまで予兆も何も分からなかったから。何かがきっかけで能力を自覚して発現することが多いみたい」

「なるほど……」

感心しながら指輪を指に填めてみる。フランが填めると親指にしか合わないらしいのであまり使っていないみたいだ。色々填めてみたが左手薬指にぴったりだった。

「何処に填めているのよ!」

赤くなりながら怒られる。どうやら此方の世界でも薬指の指輪は特別なものらしい。填める前に少し考えたがそういう習慣がないと勝手に思い、問題ないだろうと薬指に填めたが失敗だったようだ。

「薬指が丁度いいから」

「……」

フランは何か言いたいようだったが俯いてしまった。それ以上何も言っていなかったのとおりあえずこのまま適性を調べることにしよう。

後で聞いたことだが左手薬指は愛の証を示し、結婚や婚約の際に指輪を贈るらしい。このあたりは地球の習慣と同じだった。

「……それじゃあ魔術適性を調べましょうか」

魔術適性は基本的に下級魔術を使用してみるのが一番早い。今ハジメがしているような魔力制御の指輪などを使えば魔術の未経験者でも比較的簡単に下級魔術を使用できるようになる。

「大切なのは発動のイメージだから。詠唱を教えるからその言葉から魔術のイメージをしてみてください」

魔術の発動には必ずしも詠唱は必要ではない。発動のイメージと魔力が最も大切になる。詠唱はイメージを固めるための物で、高位の

魔導師は中級程度までなら無詠唱で発動できる。詠唱は個人でイメージしやすい様に変更することも多いようだ。

『封書』

フランが封筒のようなものを取り出し呪文を唱えると一瞬魔法陣が現れて、その封が閉じられた。

「……」

「……これが無属性の簡単な術かな。他にも念話なんかがあるけど最初に使うのはこの位がいいんじゃないかな」

なんとも地味な魔術だ。今回はただ封をただけらしい。嚴重に封書をする場合は開封の方法を教えた相手にだけ開封できるように術を組む。普通の手紙などは封蝋などが一般的らしい。

「魔力の込め方は魔術のイメージをしながら発動具に集中するの。息を吐く感覚に似てるかな。一度暴走したから魔力の感覚はあると思うけど、その感覚を息を吐くように発動具に注いであげるの」

体の内側に意識を集中すると、確かに以前には無かった感覚がある。体の感覚器官が一つ増えたような感じがする。

『封書』

開いた封筒を受け取り封が閉じるようにイメージしながら呪文をかける。するとフランの時と同じように封が閉じられた。魔法陣は見えなかった。

「初めての魔術が地味……」

「無属性は適性があるわね。風と水は手本を見せてあげられるけど地と火と稀属性は呪文とイメージを伝えるから、自分でやってみるしかないわ」



その後風、水とフランの魔術を手本にしながら続け、魔導書を読み上げてもらい地、火、光、影、空、時と下級の魔術を使っていた。

「地属性以外全て適性があるなんて……。魔力からして異常だけど、これは……」

「……」

結果、ハジメの魔術の適性が異常に高いことが分かった。現在最も有名な空属性の魔導師でも四属性しか適性が無い。しかしハジメには八属性に適性があった。歴史上最も優れた魔導師は九属性全ての適性があったと伝えられているが、ハジメはその魔導師に匹敵するほどのものだった。

「これはあまり知れない方が良いと思うわ……」

「だよね……」

このような高い資質を持つ者がいるとなると様々な国が囲い込もうと画策する可能性は高い。実際、稀属性に適性を持つものの殆どは何処かの国で囲われて他国に流出しないよう、半軟禁状態にある。それが全ての稀属性となると先が見えている。

「人前では火、水、風、無から三つほどに絞って使用するようになるべきだと思う」

「どれがいいかな？」

「暫くここに住むようなら風と無属性で転移魔術が使えるようにした方がいいわ。ハジメの魔力なら街に行くにも転移魔術を覚えて移動した方が楽だし」

火属性はそのまま火や熱を扱う。水属性も液体などの扱いが一般的で、他に治癒の魔術にも効果を発揮する。風属性も治癒に効果があり水と組み合わせると複合治癒魔術が可能になる。風は気体を扱う特性もあり、一般的な結界等も風属性が代表的だ。無属性は最も使用者が多く、他の属性との組み合わせるものが多い。軽量の物の転送などは無属性単体で発動できる。念話なども無属性術者が必要になる。

「火属性なんかは魔導具があれば火はおこせるし、水と風がいいかもね。私が言うのもなんだけど水と風と無属性があれば、よほどの事が無い限り大丈夫よ」

「そうしようかな」

「一人で冒険者続けるにしても転移が使えれば都市間の移動もかなり楽になるしね」

「……ここに居ちゃいけない？」

「それは……いいけど。冒険者になって家賃と食費ぐらい払いなさい」

「うん。よかった。……指輪も貰ったし」

「……」

最後の言葉には特にコメントは返されなかった。

正直自分でもおかしいと感じている。今まで異性に対して此処まで積極的に接したことは無かった。二日間フランと過ごしたが彼女の隣はすごく居心地が良い。初めてフランを見た時の感覚が忘れられない。

この世界でフランしか知り合いがないので不安になっているのだ

ろうか。初めてのことばかりで浮かれているのか。

(嫌われないように気をつけよう……)

この二日間のことを思い出しながらふと気になったことが浮かんた。

「そういえば、魔導具って自分で作れるの？」

「ええ。何か作りたいの？」

「せっかく火属性が使えるからお風呂でも作ろうかと」

「お風呂？ 昨日言っていた？」

「この世界には蒸し風呂とかしかないのかな？ 湯船に入ったりしない？」

「湯船はあるけど普通の家にはないわね。水も大量に必要だしお湯を温めるのも大変だから」

「お湯を魔法で沸かしたりしないの？」

「火の魔法で温めるって事？ 魔導具を使うにしても人間の魔力じゃ効率がよくないわ」

「ということは魔力が高ければ出来る？」

「出来るでしょうね」

とりあえず実現は可能なようだ。魔力についてはフランからお墨付きを貰っているから大丈夫だろう。

「フランは普段どうしてるの？」

「私は普通に沐浴してるけど……この家の近くに小川が流れているから」

フランは沐浴しているらしい。この二日間ハジメはお湯で体を拭いていた。

せっかく火属性や水属性に適性があったので浴槽という名の魔導具

でも作ろうと思う。

お風呂のことを考えながら文字の練習用に何枚か貰った紙にお風呂について書き込んでいく。檜木とかあれば檜木風呂が作りたい。檜木風呂の妄想を絵に描きだしていく。

「……何やってるの？」

フランが手元の紙を覗き込みながらにやら驚いた顔をしていた。

第5話＜能力発現？＞

「……何やってるの？」

「何って、お風呂作りたいなと思って」

絵を見たのなら話の流れから分かっていると思ったのだが。驚いた顔をしているのがよく分からない。

「あ、もしかして紙使ったのが拙かった？ 文字の練習用にくれたから紙の価値は高くないのかと思って……ごめん」

「それは別にいいわ。その紙はそこまで高くないから。」

「そっか。ならなんで？」

「その絵……魔力が込められてるから。普通のインクで書いた文字や絵に魔力は込められないんだけど」

「魔法陣は？」

「魔法陣は魔力で形成されるのよ。魔法陣を、発動せずに大量の魔力で維持し続けて刻印になるの。その指輪のリングには刻印が魔力で刻んであるって言ったでしょ？ 刻印は魔法陣そのもののよ」

「へえー。それじゃあ魔導具を作るためには魔法陣が必要になるのか」

「さっきハジメは魔法陣を作らずに魔術を発動していたけど、魔導師なら自分のイメージを魔法陣として形作ることが出来る。初級や中級で魔法陣無しで練習していたら上級に行くとき大変よ。魔法陣を魔力で作る。これが出来て初めて魔導師としては一人前ね」

「……イメージを魔法陣にする？」

「んー、正確には違うけど……イメージを魔力として体の外に出すときの魔力の形っていうのかな。未熟な魔導師だと魔力が拡散して魔法陣の形を取れなくて見ることが出来ないけど、魔法陣の形を形作れるようになれば魔力が拡散しないし、消費も減る。魔術を発動

するとき体の外に出た魔力をしっかりと捉えることが出来れば魔法陣も綺麗に現れるわ」

通りで自分の魔法陣が見えないわけだ。魔法陣無しで発動する才能でもあるのかとちょっと思ってたけど違ったらしい。未熟者だそう
だ。

「で、話は戻るけどその絵はどうしたの？ 魔力がインクというか
絵自体に宿っている様に見えるんだけど」

「どうって、風呂の絵を描いただけなんだけど……」

「描く時は何してたかわかる？」

「檜木風呂の妄想をしたかな。こんな風呂がほしいなと」

「魔力を込めてたんじゃないの？」

「込めてないと思うけど……」

「……」

「……」

フランにジト目で見つめられる。若干目が据わっているけど美人に見つめられると恥ずかしくなってしまう。

「な、なにか？」

「……さっき魔法陣の話をしたでしょ？ イメージを体外に出すとき
の魔力の形。それに近い気がしたから魔術じゃないかと思っただ
け……もしかしたら能力の一部じゃないかと思って」

「え、能力がある！？」

「まだ分らないけど。絵に魔力を込める能力とか意味不明だわ。
たぶん何か意味があると思うんだけど、私には分からないわ」

「……それだけの能力とかないよね？」

「もしかしたらそうかもしれないわよ？」

ニヤツと笑ってこちらを見る。ホントにそれだけの能力だったらがっかりだ。フランの魔力走査では魔力は分かるけど絵は魔法陣じゃないので用途までは分からないらしい。

「とにかく能力に関係あるとしたら、色々調べてみるのがいいと思う。その絵と同じように何枚か描いてみたら？ 後でまた紙をあげるから。無駄遣いはしないでね」

「ありがとう。やってみるよ」

「それじゃあ、またまた話が戻るけど、風、水、無属性で良いのね？ 私もこの三つなら教えられるし、上達ははやいと思うわ。他の属性は幾つか魔導書があるからそれを読みながら練習ね。属性の使い方と特性を覚えたらそのうち自分で魔術を組めるようになるわ」

「うん。おねがい」

「それじゃあお昼にしましょうか。お昼からは少し魔術の練習をしましょう。転移魔法位まではさっさと覚えてもらうからね」

「それって、複合の上級魔術って言ってなかった……？」

「最上級よ？」

「……」

結構なスパルタになりそうな予感。



その日の特訓が終わったのは森の広場に夕日が射した頃だった。ハジメの上達は目を見張るものがあり、風と水の中級魔術までも魔法陣が綺麗に組める様になった。火属性や稀属性は後回しで、フランが言っていたようにまず複合最上級魔術の転移を覚えさせるつもりだよ。

「一通り中級は組めるようになったと思うけど、どう？ 魔法陣が

無意識に綺麗に現れるようになったかしら？」

「無意識って……。まだそんな境地まで至ってないよ」

「正直一日でここまで出来るとは思ってなかったけど、明日には二種属複合くらい出来るようになるんじゃない？ エルフでさえ魔力制御には時間を掛けるのに半日だなんてね。魔力も減っている様子もないし、益々化け物ね」

「化け物って……ひどい。僕も正直こんなに魔術を覚えるのが早いのはどうかと思うけど。魔術といえば魔法使いの師匠に弟子入りして一つずつ教わって行くと思ってたから」

「人間はそうでしょうね。エルフは基本的に親から学ぶことが普通だと思うわ。私はお……姉から教わったわ」

フランにはお姉さんが居るらしい。少し言葉に詰まったのが気になったが話の流れを遮るのもよくないし、言い直したのだから気にしないことにしよう。

「お姉さんが居るんだ？」

「ええ。この魔導具の杖も姉から貰ったの。昔、姉が使っていた物に私の水属性の魔宝石を追加してもらって使ってる。別に追加する必要は無かったけど杖を貰った後に姉からこの魔宝石を貰ったから」

魔宝石は宝石が膨大な魔力で変質したもので、それ自体が特定の魔力や属性を持つものではない。元になる宝石の種類によって特定の魔力と相性が良く、術発動の際に一種のパスや増幅器の役割になる。相性が良い魔力は増幅される。

魔宝石が詰められる魔導具本体は、材質により魔力の浸透・減衰率が異なる。体内の魔力は魔導具を通り魔宝石内部で魔法陣を構築する。発動の際に魔導具外部に魔力が魔法陣の形を保ったまま放出され、魔術としての現象が発生する。

もちろん、大気中に魔法陣を直接構築することも可能だが、一度体

内から放出された魔力は拡散しやすく、複雑な魔法陣は形を保って
いられない。人間の体内は魔力が溢れているため体内での魔法陣構
築は難しく、魔力によって変質した宝石は魔力を通しやすく、保持
しやすい。それと同じくらい放出もし易く、魔法陣構築の場として
は最適になっている。

「でも三つも魔宝石があったらどれで魔法陣を構築するのか分から
ないよね？」

「魔力は操作できるんだから慣れれば出来るように……明日からは
魔宝石が複数付いている魔導具で練習しましょうか」

「あれ、そういうことになるの……？」

「といっても、他に複数の魔宝石が付いている魔導具が無いわね……
」

「それじゃあ、あしたは——」

「明日は街に行きましようか。食材なんかも無くなって来たし、つ
いでに魔導具も買いましよう」

「お金が——」

「お金は貸してあげるから安心して。そのうちギルドで依頼を受け
て返してね」

「それはわる——」

「長く使うことになるでしょうから、それなりに良い物じゃないと
いけないかな」

「……」

言葉を挟む暇も無い。今日の特訓もスパルタに近いものがあつたが
暫く続きそうだ。なんだか魔術の練習になってから性格が変わって
いる気がする。

「それにハジメはまだ街の様子とかも見たことが無いでしょう？
ハジメの言ってた都会とやらとは違うけど賑やかな所よ。ついでに

服なんかも見て回りましょうか。その服を何時までも着ているわけにもいかないし、ローブなんかも買っておいたほうがいいわ」

「……」

「どうしたの？」

それでも色々と考えてくれているらしい。初めての異世界で拾ってくれたのがフランだったことに改めて感謝した。森の中で美味しく頂かれそうになったりしたけどフランと出会えたのだから良かったことにしておこう。

「いや。改めてフランに感謝してたところ」

「……？ まあ、いいけど」

何のことか分からないという顔をするフラン。人間は嫌いだといっていたけど、異世界人のハジメに色々と親切にしてくれる様子はそんなことを微塵も感じさせなかった。これが本当に素顔なのだろう。

「それじゃあ汗もかいたみたいだけど、今日もお湯で体を拭くので我慢してね」

「あ、……はあ。風呂が出来るのは何時になることか」

「もう此処に住む気満々ね……。夕食の準備をするから、その間に汗を拭いておきなさい」

「了解です」

そう言って家に入っていくフランに続き、ハジメも家に戻る。

台所の脇でお湯を沸かす。これも魔導具で桶一杯分のお湯を温めることが出来る。これを参考にすれば魔導具《浴槽一式》を造れるのではないだろうか。最も、水の量が全然違うので色々と工夫をする必要があるだろうが。

お湯を沸かして客室に戻る。すっかり自分の部屋になっている気で

いるので、自室といっても良いのではないだろうか。布をお湯に浸けて体を拭いていく。お風呂が恋しい。



夕食の時間まで勉強をして時間をつぶす。階下から声がかかり夕食に降りると美味しそうな香りが漂って来た。今日の夕食は肉と野菜を煮込んだスープのようだ。今日の訓練の最中に風の魔法で仕留めた良く分からないけど鳥の肉だそうだ。チキンスープみたいなものだろうと思ったが、鳥はダグミューと言うらしいので、ダグミュースープといったところか。

「明日街に行くことに関してだけど、これを渡しておくわ」
「これは？」

食事の後に、またしても指輪を渡された。

聞いてみると人に認識をずらす魔術刻印がしてあるらしく、意識を逸らすだけでなく魔力量なんかも隠してくれる。影の属性らしく、稀属性の中では安価（といっても基本の五属性よりは格段に高価）で昔買ったそうだ。

今回は少し小さく、小指にしか入らなかった。

第6話〈お買い物〉

「それじゃあ、まず市に行きましょう。野菜なんかは朝のうちに買わないと」

「荷物になるけど、往復するの？」

「この街にも家があるって言ったでしょ。一旦そこに置いておいて用事を済ませましょう」

フランとハジメの二人は朝からこのマリヴェーラの街に来ていた。この街はサルクノーレ王国内でも比較的大きな街で、フランの拠点にもなっている。フランは街の中に一つ家を買っていて、依頼などで街に泊まる際はこの家を拠点にしているようだ。

「そういえばそんなことを言っていたかも」

「納得したなら市に行きましょう。荷物は持ってもらうからね」
「了解です」

マリヴェーラの市は街の西側にある大きな広場で開かれていた。この場所には三日に一度、市が開かれる。そこには新鮮な野菜や町の外で獲れた肉の他に、街の中で店を開いている商店なども様々なものを販売している。それぞれの店は商品が無くなるか夕方近くになると店を仕舞う為、朝から昼に掛けて、一番の賑わいを見せる。

「そういえば、何か欲しい食材があるとか言っていたわね」

「あー。でもフランは聞いたこと無いんでしょ？」

「聞いた事はないけど、見てみればいいんじゃない？ 私が見落としてただけかもしれないし、穀物なら収穫の時期だし麦でも買ってパンでも作ってみれば？」

「フランはパンの作り方知ってる？」

「……麦粉と水を混ぜるんじゃない？」

「……知らないんだ」

パンの作り方を知らないらしい。ずっと市やお店で買っていたらしいので仕方が無いのか。

「自分で作る必要が無いからね」

パンは確かイースト……酵母が必要だった気がするがこの世界ではどうなっているのだろう。粉にイースト入れて水入れて混ぜて寝かす位の事しか知らない。砂糖なんかも入れるんだったかな。先ず酵母を作る必要があるが、果物やヨーグルトで作れると聞いたことがあったような無かったような。米でも作れたような気もするが、お酒だっただろうか。

（実験するしかないか？）

「小麦粉は売ってるのかな？」

「さあ、あるんじゃない？」

「よかった」

小麦粉が無かったら粉引きからしないといけないところだった。

適当に野菜と果物、肉なんかを買ってついでに酵母用に小瓶も買った。お茶の葉も売っていたので一緒に購入した。実はお茶は趣味だったのだ。コーヒーは苦手で気持ち悪くなるのであまり飲まないようにしていた。

市での食料品買出しを終え、一旦フランの家二号に向かう。二号さんは街の東側、つまり市の反対側にあったため、大量の荷物を抱えて街の中を横断することになった。街の西側は街の人間の住居が多く、街の東側には宿屋や商店、ギルドなどが集まっていて、拠点と

しては近くて丁度いいらしい。北は富裕層が集まっており領主の屋敷も北にあるようだ。

フランの家は東区の南よりであり、周りは商店が数件と市民の住居があるくらいだった。購入当時は元々お店だったらしく、かなり良い物件だった。使用していないときは結界を張って進入できないようにしているらしい。最も、中には殆どなにも置いていないため入られたとしても特に害は無いようだ。

「次は魔導具か、服ね。魔導具は東側にあるし、服は中央に近いところだったかな？ 先ずは服から買いましょうか。私のローブじゃ不恰好だわ」

今ハジメが着ているのはフランのローブである。フランより背が高いハジメには若干丈が足りなかったらしい。ローブというものを着たことが無かったハジメは特に気にしていなく、コートみたいな感覚で身に付けていた。どうやらフランの基準では許されなかったらしい。

服屋に着くとフランはローブを物色し始めた。ハジメはフランに言われて普段身に付けるための服を見ることになった。店内には街で良く見かけるようなズボンや服が並んでいた。洋服屋でバイトをしていたハジメとしては若干不満に感じつつも、出来るだけ違和感の無いものを幾つか選んでいった。

暫くするとフランが幾つかローブを持って近づいてきた。まっすぐ立つように言われ、前方から若干色の違うものを掲げて眺められた。一通り確認すると何も言わずに一着をハジメに渡し、戻って行った。ハジメの意見を聞くつもりは無いようだ。

「店主。これだけお願い」

「ありがとうございます。……合計で三二〇エルドです」

(三二〇エルド……三万二千円くらいか。高いのか安いのか。)

フランは小金貨三枚と銀貨二枚を支払い店を後にした。その場でフランは、買ったばかりのローブをハジメに身に着けさせると、自分もローブを身に着けた。ハジメは髪と眼の色を変えていたが、念のため、ローブについているフードを被っていた。黒髪と黒目はごく目立つということで、出発前にフランに変えられていた。

「それじゃ、後は発動具ね。……ハジメは何か武器が使えるの?」

「? 一応剣術を習っていたけど、実戦で使えるかは分からないよ」
「それなら、剣を持つことも考えて指輪か腕輪の発動具がいかしら」

発動具について話しながら、魔導具を売っているお店に向かう。店内に入ると壁に備え付けられた棚やテーブルの上に様々な物が並べられていた。中には無造作に籠に入れられた杖などもある。

「風か水の発動具はあるかしら。形状は指輪か腕輪のものが良いんだけど」

「風か水ですか? それでしたら……こちらですね。両属性が使えるものになりましたら、今のところこちらの杖しかないですね。腕輪は現在水の属性のものしかございません。小さめのもので良いのであれば耳輪などもございますが?」

「ハジメ。幾つか試してみなさい。サイズが合わないと思えないから。ピアスなら関係ないから材質や刻印で選んでも良いけれど」

「了解」

フランに促され幾つか指に填めてみる。填められるものは幾つかあったので指輪にすることにした。ピアスは痛そうなので今まで着け

た事が無かった。体に穴が一つ増えるのは遠慮したい。

サイズの合うものからデザインや刻印を基準に選んでいく。結局、水と風の指輪を購入した。風の指輪には今ハジメが着けている無属性の指輪と同じ魔力制御の刻印がしてあるそうだ。水の指輪はサイズを補正する刻印がしてあった。

風の指輪の魔宝石は他のものより若干大きく、他の属性との複合は風の指輪でする様にフランに進められた。

魔導具店から家に向かう途中、フランはギルドに寄ると言って別行動をとることになった。クルオルウルフの一件で経過を確認したいらしい。フランから借りた鍵を使って家の中に入ると家にあった紅茶を淹れて一息つく。紅茶はキャンディに近く、クセがなく口当たりが良い、結構良い茶葉のようだ。これならいろんな楽しみ方が出来るだろう。

紅茶に地名で名前をつけることは無いようで、何処産の茶葉か分からないのが難点だ。今日買った紅茶は国内の山地の物なので、もしかしたら同じものかもしれない。遠くから取り寄せたりはしていないだろう。

（紅茶からも酵母は出来るんだよね？）

紅茶を始めた頃にそんなことを見ていたことを思い出した。果物と一緒に後で試してみる事にしよう。そんなことを考えながらお茶を飲んでいるとフランが帰ってきた。

「おかえり」

「ん、ただいま」

「……どうかした？」

フランが何か考えているようだったので気になって聞いてみることに

にした。紅茶を用意しながらフランに何があったか訊ねる。

「私宛にギルドに依頼が来ていたのよ。断っても良いけど、どうしようかと思つて。国外に出るからハジメの意見も聞いておかないと」
「なんで？」

「私が暫く居なくなるからよ。森から街まで遠いし転移もまだ出来ないでしょ？ 帰ってくるまでここに居てもいいけど、どうする？」
「直ぐ出るの？」

「明日には出るかしら。転移で近くまでは行くけど、他にも同じ依頼が黒のランクのチームに出ているらしいから、その人たちと一緒に行動することになると思う。直ぐには戻ってこれないかも」

「一緒に行つてみてもいいかな？ だめなら転移だけでも覚えて家に居るよ」

「来るのはかまわないけど、あまりすることも無いわよ。私は戦力としてじゃなくて風と水の使い手として呼ばれたんだから。一緒に行動して依頼が済んだら解散。特に面白いことも無いわ」

「風と水の使えてだから呼ばれたの？ 他には居なかったのかな？」

「私は転移が出来るからね。少し離れた国だから到着が早いほうが良いらしいわ」

「なるほどね。帰りはゆっくり帰ったりしない？」

「いいけど、どうして？」

「旅つてしたこと無いから。夜営とかやってみたい」

「……その辺で一人ですればいいじゃない」

「そうだけど……」

なんとなくその辺ですると、旅をするのでは色々と違う気がするのだ。

「まあいいけどね。それなら他のチームと分かれてからになるかな。ついでに何か依頼を受けてみるのもいいかもね」

「ギルドに登録しないかね」

「そうね。これから向かいましようか。依頼の返事と一緒に同行することを伝えておきましょう」

ギルドに向かってさっさと登録をして昼を何処かで摂ろうという事になった。ハジメは少し前からの魔術の弟子で、同じ属性をもつフランに上級魔術や複合魔術を学んでいる、という設定らしい。弟子が居るからと言って返事を待ってもらっているようだ。

フランの家からギルドまでは直ぐ近くで、体感で二、三分ほどだった。

冒険者ギルドの中はテーブルが並び、ちらほらと冒険者らしい人が座っていた。フランは真直ぐカウンターに向かい、そこにいた女性に話しかけた。

第7話＜冒険者ギルド＞（前書き）

とりあえず1週間連続で……

出来るだけ更新速度を落とさないようにしたいのですが、書き溜めて投稿していないため毎日の更新は難しいと思います。

のんびりと御付き合いただければ幸いです。

第7話＜冒険者ギルド＞

冒険者ギルドに着いたフランはカウンターに居る女性に話しかけた。

「いらっしやい。さっきの依頼の話かしら？」

「ええ、受けることにしたわ。これがさっき言っていた弟子のハジメ。残して行こうと思ってたけど、連れて行くことにしたから。…大丈夫よね？」

「お二人でチームを組むなら大丈夫でしょう。そちらの方は冒険者？」

「これからその登録をしようと思って」

二人の視線がハジメに集まる。カウンターの女性は見た目二十代後半で、肩の辺りで切り揃えられたブラウンの髪に、青い瞳をしていた。その目はハジメを見定めるような色をしていた。

「はじめまして、ハジメと言います。フランに魔術を教わっています」

「はじめまして。私は此処のギルドマスターをしているテリアです。よろしく」

「よろしくお願いします。テリアさん」

「それなら、早速登録しましょうか。必要な書類を書いてもらえる？」

渡されたのは名前、年齢、属性適性、職業、能力などを書くスペースが取られた書類だった。ハジメは必要事項を書いてテリアさんに渡した。

名前・・・ハジメ

年齢・・・21

属性・・・無属性、風属性、水属性

職業・・・魔導師

能力・・・

「これで大丈夫ですか？」

「んー……ええ、大丈夫よ。属性はフランと同じなのね。すごいわね、三つの属性を使えるひとは多くないのよ」

「ええ」

テリアの呟いた言葉にフランが反応した。使う属性については話していなかったようだ。フランは財布から小金貨一枚を出すとカウンターに置いた。

「ちょっと待っててね」

小金貨と書類を持ってテリアさんはカウンターの奥に入ってしまった。暫くして一枚の透明なカードを持って戻ってきた。それをハジメは受け取り、説明を受ける。

「このカードは冒険者ギルドのギルドカードよ。さっき書いてもらった内容のほかに登録したギルド拠点や識別用の番号、銀行の残高なんかが見れるようになってる。冒険者ギルドには銀行もあってお金を預けておくことも出来るわ。別に銀行は使わなくてもいいわ。他の国でお金を下ろしたい場合は冒険者ギルドに預けておくとか何処でも下ろせるから、少しくらいは入れておいたらいと思うけど」

「そうなんですか」

「ギルドの規則を何度も破るようなら凍結されてしまうから注意してね」

「はい」

カードには名前と年齢と右下にギルドの印だけが表示されていた。

「右端の印のところを持ってカードに魔力を注いでみてくれる？」

フランを見て確認すると、僅かに頷いた。ハジメはカードに魔力を通す。すると名前の他に先ほど記入した内容と拠点、文字と数字が混じった長い文字列と九〇エルドと言う文字列が浮かび上がった。右端の印から浮き上がった文字を避けるようにして白い模様が広がっていく。模様の拡大が止まるとテリアさんから声がかかった。

「もういいわよ。それで貴方の魔力の登録が出来たわ」

魔力を止めると浮かんでいていた文字が消え、それを覆うように模様が広がった。右下のギルドのマークも消えて模様の一部に変わっている。前に見せてもらったフランのカードと同じような、植物をモチーフにした綺麗な模様だった。厳密じゃない場では魔力を込めない状態で呈示するが、ギルドで依頼を受ける時や、都市などに入城する際は魔力を込めて身分を証明するらしい。一年に一度は依頼を受けるか、ギルドで継続手続きをしないとカードの効力はなくなるらしい。

「二人で依頼を受けるようだから、二人ともカードを貸してくれる？」

「ええ」

「どうぞ」

カードと依頼書をカウンターの中にある石版の様な所において、なにやら操作している。カードが薄く発光し収まると石版からカードと依頼書を渡された。

「これで二人で依頼を受けたことになるから。依頼内容の詳細は伏せられているから依頼主から直接聞いて頂戴。伏せられているけどギルドで審査はしているから、違法な行為ではないはずよ」

「わかったわ。ありがと」

「ありがとうございます」

「気をつけてね」

二人でテリアさんにお礼を言い、ギルドを後にする。食事のついでに旅の支度もしておこうと云う事になり、カバンや財布、ナイフや薬などの必要なものを一通り買い揃えた。食料は今日買った物と、向こうの街で揃える事にして家に戻る事になった。

「そのナイフでよかったの？」

「うん。これをメインで使うわけじゃないし、メインにするにしても使いやすい武器が無かったからね。ナイフは無かったら困ると思うからこれでいいよ」

「そう。それじゃ、今日中に転移魔法を覚えてもらいましょうか。何時も私が一緒に転移するのは大変だから。行きは連れてってあげるけど、帰りは暫く旅して転移で帰って来るようになるからね」

「うーん。了解です」

よろしくお願いします、と頭を下げる。今日からは三つの魔導具を使い分ける練習も加わるため、中級魔術で軽く練習して上級魔術と複合魔術に取り掛かった。



広場の一角に氷結槍の雨が突き刺さる。
現在ハジメは各属性の上位魔術を終え、複合魔術を実践していた。
氷結系の魔法は水属性と風属性の複合魔術だった。転移魔術を習得する前に無、水、風属性で可能な複合魔法の練習を行うことが必要だった。

『氷結槍！』

転移魔術や飛行系魔術は他の複合魔術と違い自分自身にその効果が掛かる為、習得前に魔力を合成する感覚に慣れる事が必要だとフランは言う。

『氷結槍！！』

複合魔術には他にも系統が存在する。火属性と風属性の爆炎系や水属性と風属性の複合治癒系、移動系にも無属性と風属性の複合や地属性と風属性の複合魔術。空と時の時空系は過去に二人しか使用者が居ない。

「フリーズー」

「そろそろいいかしらね」

地面に突き刺さる氷が庭の一角を埋め尽くし、地面が見えなくなつた頃、ようやくフランからお許しが出た。まだ涼しくなるには早い季節だが森の中にある家の庭周辺には冷氣がこもっていた。ハジメが吐く息は白く体は震えていた。

「さ、さむい……」

「どうかしら。属性を合成する感覚は分かった？」

「わ、わかった。だい、だいじょうぶ」

「そう。それなら次は複合上位に行ってみましょうか――」

「た、タイム！」

「……なに？」

「さ、寒いからちよつとタイム！」

「そう、それならついでに火属性の魔術でも使ってみましょう。中級くらいなら簡単に出来るでしょう？ あの水の山を火属性魔術で消してみなさい」

「……」

結局休憩無しで火属性中級魔法の連発が始まった。

氷山が無くなった頃今度は蒸し暑い熱気がこもり、風魔法で吹き飛ばす。その後、複合上位魔術の練習として、風属性と無属性の合成での飛行魔法の練習に入った。重さを扱うのは無属性らしく、風と無属性で減重、地と無属性で加重の重力系を扱うことが出来る。無属性単体でも重力系は可能だが、重力系に移動などの付加効果を追加する場合、他属性との合成が必要になる。

『身体強化』

フライ

『飛翔』

墜落したときの為に身体強化を掛けて飛行魔術を発動する。高度をあまり上げない様にしながら家の周囲を旋回する。人間が空を飛ぶと言う事に改めて感動しながら飛行・旋回・着地を繰り返し返す。風単体の飛行は飛んでいると言うより風で飛ばされている感じだったが、無属性が加わったことにより自在な飛行が可能になった。

ハジメの習得速度は異常な早さだった。普通上位の複合魔法の魔法陣形成は簡単なものではない。中級でさえ時間を掛けて、魔法陣が綺麗になるまで指導を受けながら練習するものだ。ハジメは複合の最初こそ戸惑っていたが、慣れてくると初めての魔術でも一度で綺

麗な魔法陣形成をやったのけた。魔力量が多く、連続して大量に発動できることも早熟の一つの要因だった。

結局、夕食前までに単独での転移を習得し、その日の訓練は終了した。



——次の日の朝。

ハジメはフランと共に大陸北部にあるサンデダン王国の王都にやってきていた。サンデダンの気温はこの季節でもサルクノーレより涼しく、過ごしやすい。水の季節には雪が降り、北部の山は雪に閉ざされる。

この国は東に接する大国、カメリア皇国と友好的で、奴隸制などの廃止や他種族の人権を認めている。しかし、反対の西側や南側は人間主義の国が多数存在し、サンデダン国内でも奴隸などにする目的で人間狩りや、亜人狩りが行われていてその被害は収まっていない。

ハジメ達は街の店を幾つか回った後、冒険者ギルドに顔を出した。ギルド内部はマリヴェーラの街のギルドより広く、二階には食事が摂れる休憩所が設置されていた。依頼を受けて来たことをギルドマスターに報告すると、同行するチームの到着まで、二階で休憩を取る事になった。

「依頼が終わったらデルフェノに行きましょうか。此処から西に行った所に海に面した国があるから、そこまで歩いていきましよう。結構大きな国で他種族も居るから私も過ごしやすいと思うし。途中少しだけ別の国を通ることになるけど街に寄らなければいいわ」

「異種族に厳しい街？」

「ええ。でもデルフェノに入れば友好的な人も多いから。魚でも買って帰りましょう」

デルフェノの街はメインコルヌ王国内の港町である。過去にフランも行ったことがあり、海の幸も豊富なようだ。サンデダンの国境からは歩いて十日くらいかかるらしく、旅はそれで十分だろうと言われた。途中の国は飛行魔法でさっさと通過することにし、実質八日程でデルフェノに着くだろう。道すがら王都にも寄り、買い物もしようということになった。

暫くして、ギルド員に応接室まで案内された。

第7話＜冒険者ギルド＞（後書き）

ありがとうございます。

次回は初めての依頼になります。

次の更新は明日（12／9）か土曜日（12／10）になると思います。

第8話＜依頼＞

ギルド員に案内された応接室には、この街のギルドマスターと冒険者らしい男女が五人に、依頼主らしい男性が集まっていた。依頼主は身なりの良い格好をしており、貴族かそれなりの生活をしている者ようだった。

メンバーがそろったところでギルドマスターが話を切り出した。

「全員揃った様なので改めて。俺がサンデダンギルドマスターのグロンドだ。これから話す内容は外部に洩らすことが無いように。依頼終了後も同様だ。いいかな？」

黒以上の冒険者のチームに指名で依頼が来る場合、その多くが機密事項を多数含む場合がある。それは国家の機密であったり、個人、他のギルドなど様々だ。もちろん依頼する際にギルドマスター以上またはギルド本部の審査は必要となる。他国の権利を侵すような行為は認められていない。

ここに居る皆、それを分かっているため黙って頷いた。

「ん。それでは依頼の内容はこちらのリシンさんからお話いただく」
グロンドに目線で促されたりリシンはゆっくりと話し始めた。

「このたびは依頼を受けて頂いてありがとうございます。私とはある高貴なお方に御仕えしております。先日お嬢様が街の様子を見ると仰られ、護衛数名を連れてお忍びで街にお出掛けになりました。お嬢様はしばしば街の様子を視るとお出掛けになるのでその日も何時もの様に御帰りになるのをお待ちしておりました。暫くして、護衛の遺体が街の外れで見つかったとの報告がありました。我々は全

力を持って搜索を行いました。出てくるのは他にも数名の少女や女性が行方不明になったと言う情報だけでした」

そして、行方不明になった女性の中に無属性だが属性を持っていたものがいた。その人間から家族が念話で連絡を受け、現状が把握できたと言う。女性は現在サンデダンの北西に接するジェイムの国のペイダンの街に向かっていていると言うことだった。一緒に捕まっている女性の中に依頼人の探している女性がいたという事でギルドに今回の件を依頼。

女性たちは奴隷の首輪を填められていて、今回の依頼内容は女性たちの解放及び奴隷商人の確保。敵国であり、兵士を動かすことは出来ないとすること、他国でも自由が利く冒険者による速やかな奪還を希望しているらしい。女性は重要な人物であり万一にも危害が加えられてはいけない。また、奴隷にされたなどと言われることが無いよう秘密の厳守が求められる。

「私は移動の補助と、万一そのお嬢様に危害が加えられた場合の保険と言うことですね」

「はい。首輪により行動の制限がされており、目的がばれた場合人質にされる可能性もあります。その場合最悪……。それと今朝、女性の中に一人酷い怪我をしている者が居ると報告がありました。こちらの女性の治療もお願いしたい」

「分かりました」

「我々は奴隷商人の確保と護衛の討伐及び女性たちの安全の確保、ですね。護衛の騎士が殺されていたところを見ると、かなり腕の立つものが関わっている可能性も有りそうですね。」

「その通りです」

「分かりました。直ぐにでも出発の方が良さそうですね。馬の用意はお願いできますか？」

「既に馬を用意させております。換えの馬も国境付近の町で用意さ

せておりますので、そこで乗り換えてください」

同行するチームと簡単に自己紹介を済ませると、直ぐに出発することになった。ギルドから出る際気になったことをフランに聞く。

「……フラン」

「なに？」

「馬なんか乗ったこと無いんだけど」

「……そうだったわね。私の後ろに乘るか、飛行魔術で向かいましょうか。……ハジメの魔力なら大丈夫だろうけど目立たないよう馬に乗った方がいいわね。私の後ろで減重の魔術を使って？まっていなさい」

「……お願いします」

街の外には五頭の馬と馬車が用意してあった。ハジメは馬車があることに安心したが馬車と馬には交代で乗ることとなる。ハジメは馬の乗れないため馬車に軽量化の魔術をかけて乗ることになり、三人が馬に、依頼人を含めた五人が馬車に乗り込んだ。準備が整うと早速サンデダンの街を出発する。

ハジメは御者台にフランと乗り、馬車の操縦を学んでいる。

「馬に乗れなくても馬車なら直ぐ操縦できるようになるんじゃない？ 馬の練習は……馬を買うか何処かで借りるしかないから今は無理ね。移動に困らないし、世話も面倒だし私は持ってないから」

「でも、馬は乗れるようになっていた方がいいよね？」

「そうね。依頼なんかで移動手段が馬しかないときもあるかもしれないから。乗馬の練習はそのうち機会を見てやりましょうか」

「ありがと」

暫く走ったところで一旦、馬を休憩させることにして街道を少し外

れた水場に馬をとめる。街道の近くを小川が流れており休憩所としては最適な場所らしい。

フランと携帯食で昼食を摂っていると、二人に声がかかった。

「ちょっといいかな？」

声のかかった方を見ると同行チームのリーダーの男と、メンバーの女性が立っていた。男性は茶色の髪に薄茶色の瞳をした三十過ぎ程の外見で、引き締まった体格をしている。確か、 balan さんと言った。

「なんででしょうか？」

「いや、少し話しをしてみたくてね。黒のランクはあまり多く無くて、中でもソロで活動している黒は其方のフランシエシカさんだけなのでね」

「そうですか」

「それが今回、二人で依頼に参加している。珍しいと思って、君と話をしてみたかったんだ」

「僕……ですか？」

「ああ。聞いてもいいかな？」

「そんなに面白いことはありませんが……」

それから休憩を終えるまで、ハジメはフランとの関係について、異世界の内容などを伏せて、話した。一緒に居た女性は魔導師らしく、フランとなにやら話をしていた。



その日の内に国境の町で馬を乗り換え、次の街へ駆ける。夜間も交代で馬を駆りながら奴隷商の馬車を追う。奴隷商がペイダンの街に

到着する前に目標を確保することが最良だ。街に入られて貴族にでも買われてしまえば、問題が更に深刻になってしまう。腕の立つものも居る可能性が有るため、一度は本格的に休憩を取る必要があるため、朝方街道から外れてフランが風の結界を張り休憩を入れた。国境を越えて馬車で凡そ二日の距離を一日遅れで急行したため、ペイダンの街に到着したのは夕刻過ぎ。城門が閉じる少し前に、奴隷商隊を追うような形で街に入ることになった。チームから二人念話を繋げた者が奴隷商の監視を行い、残りのメンバーで奪還作戦の立案を行うことになった。

「街に入られたのは悔やまれるが、夕刻過ぎと言うのは好都合だったな。夜間の内に速やかに対象を奪還。奴隷の首輪を解放し朝方にも街を立つべきだな」

「そうね。出立は二手に分かれたほうが良いかしら。これ以上人数が増えて共に行動しているとなると目立つからね」

「ああ。街の外で合流するようにした方が良い。進入方法だが、フランシエシカさんには建物周囲と建物に結界を張ってもらいたい。我々が街を出るまで騒ぎが起きないほうが良いからな」

「それは考えていたわ。進入の際は建物周囲に防音と逃走防止用の結界と……念話の妨害もした方がいいかしら？ 進入中に念話が仕えなくなるのが難点だけど」

「そうしてくれ。まず対象が捕らわれている所まで行き、そこにも進入禁止の結界をしてくれ」

黒のランクの二人が代表して話を進める。第一目標の対象確保を最優先に行い、護衛の排除と奴隷商人の確保を行う。最悪商人の殺害も、第一目標を確保した場合許可されている。奴隷商と第一目標の二人は確保した後、直ぐにサンデダン王都のギルドに引き渡すことに決め、残りの対象は護衛をしながら王都へ向かうこととなった。フランも二人を抱えての転移は二度程が限界で最低限の輸送しか出

来ない。その後は大きな魔術をあまり行使できなくなるので、結界の一部はハジメが行うことが決定した。

「それじゃあ明け方近くの暗い内に開始しましょう。制圧後は三、四名で馬車と馬の確保して近くで待機。後は開城時間まで警戒することになります」

街からの脱出はチームごとに別れて行うことに決定し、フランとハジメのチームが依頼人と共に少し多めに護衛を引き受ける。

街内、室内では大規模な戦闘は出来ないため、従来の予定通りバランさんのチームがメインで行うことになる。バランさん達は室内や、洞窟内での戦闘も幾度か経験したことがあるらしく、問題は無いそうだ。

ハジメは魔術の訓練で鳥などの動物を殺しているが、人間との戦闘は初めての経験になる。一度戦闘と言うより殺戮^{テロ}を経験して死んでいるため、自身の死への恐怖心は体験済みだ。いざとなれば自分を生かすために、相手を殺すことも今のこの世界では可能だろうと思えている。

この世界では殺さなければ殺される状況は沢山存在するし、遭遇する。魔獣に盗賊、今は活発ではないが戦争などもあると言う。

「大丈夫？」

考え事をしていると、心配そうな顔がハジメの視界にうつる。ハジメが深刻な顔をしていたのだろう。

「貴方は今回の戦闘に参加する必要は無いわ。殺された事は有っても、人間を殺したことは無いのでしょうか？ 珍しい体験だけだね」

そういつて微かに笑うと、今度は顔を引き締めて向き合う。

「人を殺すことになれる必要は無い。けれど、自分が生きるためには躊躇ってはいけないわ。間違った力を振るうことは罪だけだね」

「……うん。大丈夫だよ……ありがとう」

自分の考えていることを正確に理解して声をかけてくれるフランに、ハジメの心は少しだけ落ち着いていた。

作戦開始まで後半刻ほど。ハジメの、異世界での、命を奪うための戦闘が始まろうとしていた。

第8話〈依頼〉（後書き）

ありがとうございます

次回最初の戦闘なので僕が色々と不安です。戦闘描写は控えめになるかも？

最初がこの依頼で大丈夫かな……

第9話＜襲撃＞（前書き）

投稿が遅くなりました。ごめんなさい

第9話＜襲撃＞

街に朝陽が登る前に作戦は始まった。

ハジメが全員に身体強化などの補助魔法をかけ、フランが屋敷の周囲に結界を張った。 balanさんのチームの魔導師、ケイトさんが見張りの人間の意識を刈り取る。屋敷の外では騒ぎを起こさないよう、極力殺さないように決めていた。倒れて音が出ないよう魔法で補助しながら接近する。

「それでは balanさんたちは商人の確保を、私たちは対象の確保を行います」

「よろしく。行くぞ」

balanさんたちチームは二手に分かれて対象の確保と屋敷の占拠に向かう。ハジメ達は一方のチームと対象の確保に向かう。屋敷は二階建てで建物内の気配を探ると、地下から多数の気配が感じられた。

「地下から多数の気配がするわ。入り口を探しましょう」
「了解」

一階の捜索を行うと地下に続く扉を見つけることが出来た。そこは接客室のような部屋から奥に入ったところにあった。地下へ続く階段があり、依頼人を含めたハジメ達四人は地下への階段を下りていった。

女性たちは屋敷の地下の一室に閉じ込められていた。扉ごと鍵を破壊し中へと入る。

「リシンさん。確認してください」

「確認しました。お嬢様もおられます。怪我も御座いません」

「王都で捕らえられたほかの女性は居ますか？」

「私たちと一緒に王都から連れられた方たちは此方の六人です。他の方達は私たちが来たときには此処に居られました」

「そうですか。この屋敷を制圧した後あなた方を解放します。私たちは貴方たちを連れてサンデダンに向かいます。……他の方々はどうしましょうか」

中には十名ほどの女性が居て、第一保護対象である女性も居ることが確認できた。怪我人の治療を行いながら今後の方針について話し合う。

「希望者は連れて帰っていただければと……。この程度の人数ならば仕事が必要な方は紹介できるかと思っています」

「それは……。いいでしょう。貴方は暫く此処に居てください。私たちはバラン達の援護に向かいます」

ここに居る女性たちの解放や、仕事の斡旋をしたところでこの国での……周辺国での奴隷の問題は解決しない。生活が苦しく、奴隷となるものもいるこの国で偽善と思われる行為だが、依頼主が提案する以上……実際不可能ではないため、無碍には出来ない。

ハジメは部屋の中に結界を張って不可侵の領域を創り上げると屋敷の搜索に向かう。

「ハジメ。離れないで着いてきてね」

屋敷内には護衛などは殆ど居なかった。その護衛たちもバラン達に完全に制圧されていた。遭遇した者は口を封じ、寝ていたものたちは眠りの魔術を更にかけられ拘束した。奴隷商は寝ているところを起こされ、軽く尋問してから睡眠の魔術を施し、暫く目が覚めない

ようにしたようだ。

「戻りましょう。リシンさんが遮念結界の外から王都に連絡しているから連絡が取れ次第、奴隷商人と彼女を連れて行くわ」

捕らえた者たちに浮遊の魔術をかけ、 balan 達と共に警戒しながら地下に戻る。一度結界を解いて中に入り再びかけ直す。

「リシンさん。王都に連絡は出来ましたか？」

「はい。直ぐにでも転移をお願いしたいのですが」

「分かりました。ギルドに引き渡した後戻ってきますので暫くお待ちください」

リシンにそう言うのとハジメのほうを振り向く。

「ハジメ。私の結界と同じものを張って頂戴。魔導具無しに遠くから結界を維持するのは大変だから」

「ん……これでいいかな？」

「ええ。……効果しか教えていないのに簡単にやっちゃうのね。魔術の構造が読めるのかしら？」

「んー、魔術を習い始めた頃は良く分からなかったけど、最近はあるとなく解るようになってきたかも。頭もすっきりしてきたし此処サルトクリゼに慣れて来たのかも？」

魔術を使っている内に段々と体の感覚が馴染んで来た気がするのだ。この世界に来てから六番目の感覚器官——直感が六番目なら七番目になるが——となった魔力器官も当たり前のように感じる事が出来てきた。それに伴い他の五感も澄んできた気がする。

視覚が無くなり聴覚が発達するという事は聞いたことがあるが、感覚が増えたことにより他の互換も発達したようだ。体も地球にい

た頃とは比べ物にならない程軽くなってきた。

第六の感覚が完全に体に馴染んだ時どうなるか楽しみであり……怖かった。

「そう。もう私なんか超えてるかもね。馬車の確保をする場合は結界内を確認してから逃走防止用の結界だけ解けばいいわ」

少し寂しそうに呟くと、フランは二人を連れて王都に転移した。



フランが戻るまでに、それぞれ行動を起こすことになっていた。バランはチームの内四人に馬と馬車の用意を命じ、ハジメと共に屋敷周囲の警戒にあたる。

現在は屋敷内の結界を残し、屋敷周囲の逃走禁止の結界を解いているため、遮音結界内の通行が出来てしまう。そろそろ日があけるということで人が起き出して来るのに注意しなければならない。

外を警戒していると自分に近づく気配を感じた。その気配はかなり希薄で、結界の魔力の揺らぎで何とか知ることが出来た。かなりの実力者らしい。

「連絡が無いから来てみれば……取り込み中だったか」

「……どちらさまでしょう？」

「しがない傭兵だ。今はそこ屋敷の商人の護衛に雇われていてな……」

（こいつが王都で護衛を殺したやつか？）

王都では護衛の騎士が殺されていた。この屋敷にいた者たちでは騎士を殺害し誘拐することなど出来ない。この男が誘拐に加担し護衛騎士を殺害したのだろう。

ハジメは遮音結界に静かに逃走防止用の結界を加え男の退路を断つ。転移は阻害しないのでフランが戻ってくることも出来るだろう。

「護衛？ 誘拐を行うのも仕事の内なのですか？」

「さあな。何処であろうと敵を斬るだけだ。金を貰って人を殺す。それが傭兵の仕事だろう？」

男は笑顔でそう言うと、唐突にハジメへと斬りかかる。帯剣していた長剣を瞬時に引き抜いて五メルデはある距離を一瞬でつめた。

「……ッ！」

（防護障壁！）

ハジメは咄嗟に魔術を行使し、男の剣を弾いた。続けて風の魔術で障壁前方に爆風を創り出した。

「っと！ ……よく防いだな？」

男は風の発生と共に大きく後方に飛び退き発生した風をやり過ごす。創り出した風は魔術の難度としては下級の物だがハジメの魔力により、その威力は中級魔術ほどの効果を発揮していた。しかし、相手を殺せるほどの威力は出ていない。尤も、暴風で吹き飛んでいれば普通の人間ならば大怪我をしているだろう。

（殺しに来たか……）

ハジメは胸の内で小さく溜め息をつく。人を殺すことに対して躊躇いは有るが黙って殺されるつもりは無い。一度目の死では自分の無力を味わったが、今は自分の身を守るだけの力がある。生きるために殺す。守るために殺す。

「投降してください。貴方に僕は殺せない。貴方は法によって裁かれる」

先ほどの風の障壁を張れば此方が傷を負う事は無いだろう。フランが言うには『ハジメの魔力なら中級程度の障壁を張るよりこっちの方が頑丈でいい』とのことだ。上級の結界を元にフランが編み出したらしい。人間の魔力では何度も出来ない程の魔力を必要とする。

「ほう。俺が何をしたのかな？」

腰に差した大きめのナイフを構えながら、ハジメは僅かに考えた。誘拐に殺人。誘拐については奴隷商人が行い護衛として同行したのだろう。商人が誘拐を自供したらしいのでこの男が同行していたことも調べれば分かるだろう。

雇われたから依頼主を守るために人を殺す。それはこの世界では当たり前のことだ。そこにある善悪は別として。

この男を捕らえることが出来れば商人の証言で裁くことも可能だろう。

「傭兵として雇われ、依頼主の敵を殺す。それが仕事だ」

（だが、この男……）

この男の言い方は人を殺すことに執着しているようだ。これまでも

同じような仕事をしていたのだろう。

「屋敷に結界が張ってあって中は分からないが……仕事でね。殺してあげよう！」

再び笑みを貼り付けた顔で男が斬りかかる。ハジメは男の剣を障壁で受け止め、強化した体で後方に大きく飛び退く。

『風刃連舞！』

魔術の風が男に襲いかかる。膨大な魔力で練り上げられた複数の風の刃は男を鎧ごと切り裂いた。



屋敷周囲の結界を一部解くと馬車と共に balan がやって来た。どうやら結界を張り直した際に結界の外に出ていたらしい。結界内に入ろうとしても入れなかったため、何かあったのかと思ったがどうにも出来なかったと言う。仕方なく警戒しながら馬車の到着を待っていた。

「これは……ハジメ君がやったのか？」

「はい。奴隷商の護衛の男です。おそらく王都で騎士を殺したのもこの男でしょう」

「そうか。おい、屋敷内に運べ。こんな道の真ん中に死体があるのは拙い。二人は血痕を片付けてくれ」

balan はチームの男に死体を運ばせるように指示し、血痕を消させた。辺りは僅かに明るくなってきておりそろそろ人が起き出す頃だ。ハジメは結界を屋敷と裏路地に縮小し、馬車のそばでフランの帰り

を待っていた。

「ただいま……どうしたの？」

ハジメの表情から何かを感じたのか、そう聞いてきた。

（そんなに分かりやすい顔をしていただろうか……）

若干の苦笑いを浮かべ、フランのいない間の出来事を話して聞かせた。

「そう……怪我はない？」

「うん。フランが教えてくれた障壁を使ったから、怪我してないよ」

「あれを使ったの？ ま、あの障壁なら特別な魔剣でも無い限り突破は無理でしょうね」

「……うん」

フランは優しくハジメの頭をなでた。身長はハジメの方が十ルーデ——十センチ——程高いが手を伸ばしてハジメの頭を撫で続ける。

「慣れる必要はないわ。さっきも言ったけど間違わなければいい」

「……」

「私はハジメが生きていてよかったと思ってる」

「……ありがとう」

「それじゃあ、そろそろ出発しましょうか。この依頼が終わったら少しサンデダン王都で買い物でもしましょう」

「うん」

ポンポンと頭を軽く叩いて屋敷に戻っていく。見た目的には同年代だが人生経験はフランのほうが豊富だ。年齢的に祖父——フランに

言ったら殺されそうだが――のような年月を生きてきたフラン。

フランに優しく頭を撫でられて、ハジメは少し心が軽くなっていた。

第9話＜襲撃＞（後書き）

ありがとうございました。
戦闘描写少ないですね……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0626z/>

一つの異世界

2011年12月20日20時54分発行